解　説

林嵜　伸二

本書で抄訳をした『鍛冶屋の娘』(Die Tochter des Schmieds 二〇〇五年)は、トルコ系ドイツ語作家セリム・エヅドガン(Selim Özdogan 一九七一年、ケルン生まれ)が二〇〇四年に発表した長編小説である。この小説は、トルコのアナトリア地方の村で鍛冶屋を営むティムールとファトマとの間に生まれた娘ギュルを主人公とした物語で、一九六〇年代に経済発展で新たな労働力を必要とするドイツに彼女が夫とともに労働移民として渡るまでを叙事的に描いている。

エヅドガンは、とりわけ九〇年代以降に多様化を遂げてきたトルコ系ドイツ語文学の一角を占める。それ以前のトルコ系ドイツ語作家は、ドイツでマイノリティーとして生きる労働移民の日常や思いを当事者として書く傾向が強かったが、ドイツで育った移民二世・三世がドイツ社会の様々な場で活躍するようになるのと並行して、トルコ系ドイツ語文学も多様化して行ったのである。実際、エヅドガンはこの小説が出る二〇〇五年までは、トルコ系であることを強く意識させる登場人物をあまり描いてこなかった。その意味で、移民一世の女性のトルコ時代を叙事的に描く『鍛冶屋の娘』は、それまでのエヅドガンの読者を驚かせるものであった。

興味深いのは、この時期に移民一世のトルコ時代を書いた作家はエヅドガンだけではなかったことである。トルコ系移民二世作家のフェリドゥン・ザイモグル(Feridun Zaimoglu 一九六四年、トルコのボル生まれ)も翌年、長編小説『レイラ』でアナトリア地方からイスタンブールを経てドイツに労働移民として渡る移民一世の女性のトルコ時代を描いている。これら移民二世作家による〈トルコ回帰現象〉は、広い意味での異文化間・世代間の対話の試みの一つだと考えることもできるかもしれない。二〇〇五年は、トルコが欧州連合加盟交渉に本格的に入った時期でもあり、トルコ系移民をヨーロッパで最も多く抱えるドイツでは、異文化間対話の動きが活発化していた。ドイツとトルコの文化の違いは、ドイツにおいてはトルコの文化的背景を持つ移民一世とドイツ社会に同化した移民二世以降の世代の違いとしてもしばしば現れる。それゆえ一世のトルコ時代を描く二世による文学は、世代間だけではなく異文化間の相互理解を促すきっかけにもなろう。日本でも上映されたトルコ系移民二世ファティ・アキン監督の『そして私たちは愛に帰る』(Auf der anderen Seite 二〇〇七年)で、エヅドガンの『鍛冶屋の娘』は、トルコ系移民一世の年金生活者とその息子であるドイツ文学教授との関係を和解へと導く象徴的な役割が与えられている。この役割は、この時期に見られた異文化間・世代間の対話という背景のもとにようやく理解できるのではないか。

なお、エヅドガンは二〇一一年に『鍛冶屋の娘』の続編『ハイムシュトラーセ五二番地』を発表している。本書の抄訳はこの続編の最後に試し読みのために添えられている『鍛冶屋の娘』の抜粋を、作者の許可を得て邦訳したものであることを断っておきたい。

エヅドガンは、移民を主人公にした小説を書く他に、例えば、現代の娯楽メディア環境における人間のあり方を問うた近未来小説『夢雫』(Zwischen zwei Träumen 二〇〇九年)や欧州連合時代のユートピア小説『DZ』(DZ 二〇一三年)のような、現代に特有のテーマを扱った意欲的な小説も書いており、彼はこの方面でも今後期待される作家である。